

# フック余長

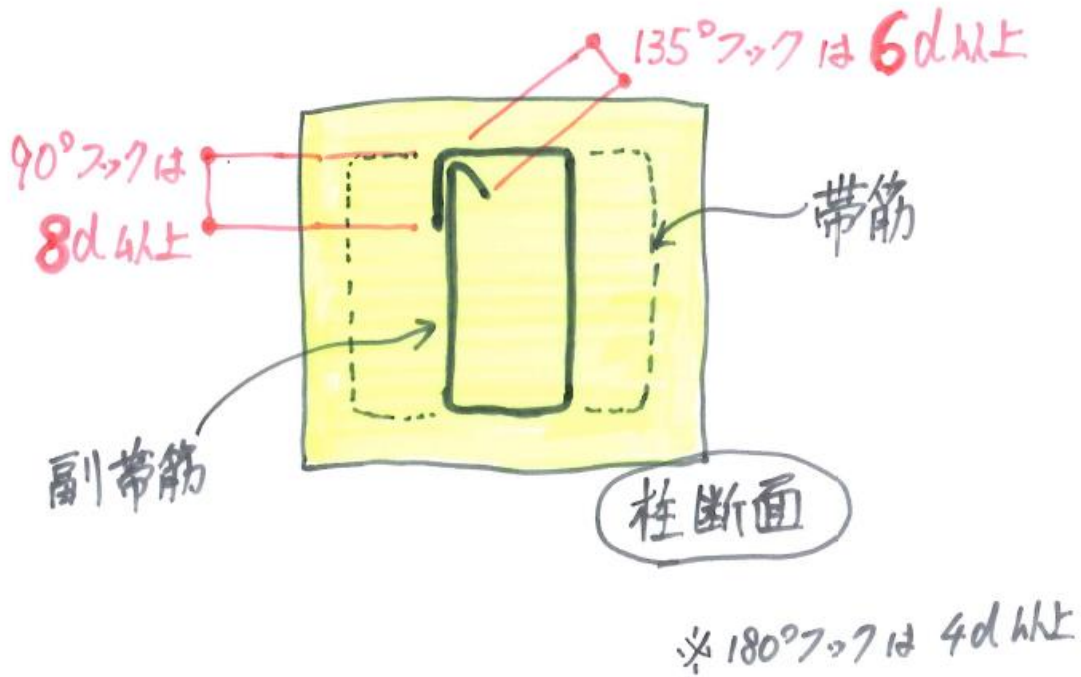


図 副帯筋のフック余長の末端角度とその必要長さ

## 出題問題

平成28年度 問題12

鉄筋コンクリート構造の配筋に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、図に記載されていない鉄筋は適切に配筋されているものとする。



**「過去問」については、(公財)建築技術教育普及センターとの過去問の使用許諾条件により、「会員講座」のみでの公開としている。**  
**ここでは、参考として過去問が見ないようにしている(会員講座では全問題を公開)。**

1. 図-1に示す副帯筋の筋の末端の一端を90度
2. 図-2に示す大梁の
3. 図-3に示すスパンが
4. 図-4に示す柱梁接合部において、せん断補強筋比0.3%相当の帯筋を配筋した。

解答 (正解数2)

- 1 副帯筋の末端は、135° フック余長6d以上(又は180° フック余長4d以上)であるが、余長部が帯筋で囲まれたコア内に挿入された場合、90° フック余長8dにできる(用語解説:12.RC構造①フック余長参照)。
- ×  
2 大梁の中央部は、曲げモーメントが大きく常に引張応力が働くので、下端筋の重ね継手(用語解説:12.RC構造②重ね継手位置参照)を設けない方がよい。
- 3 図-3に示すように対角線上に主筋を配置すると、主筋が傾斜していることから、柱及び梁のせん断力を負担することができる。スパンが短い大梁は、せん断破壊や付着剥離破壊を起こしやすいが、梁断面の四隅以外の主筋を部材の全長にわたって対角線上に配置すると、その防止策となる。
- 4 図-4に示す柱梁接合部のせん断補強筋比は、0.2%以上とするので、設問の0.3%相当の帯筋を配筋することは正解である。